

転生少女は異世界で
理想のお店を
始めたい

猫すぎる神獣と一緒に、
自由気ままにがんばります！

◆ ◆ ◆
Umemarumikan

梅丸みかん

Illust. にゃまそ

Tenseishojo ha isekai
de risonoomise wo hajimetai

フラン

ヨダの町で服屋を営む、明るい個性派デザイナー。

エミュウ

ヨダの町で魔導具店を営む、頼れる天才魔導具師。

ショウ

ラルクの兄。腕の立つ冒険者として活躍している。

ダンテ

ラルクの父。温厚で包容力のある、マッチョなイケメン。

セレン

ラルクの母。優しく穏やかでカリンのことを気にかける。

グレン

(元の姿)

ラルク

ヨダの町近くにある農場の息子。無邪気で好奇心旺盛。

グレン

猫にしか見えない神獣。カリンの手助けをするため、異世界でともに暮らす。

カリン

本作の主人公。異世界の少女に転生した、元アラフォー。前世の知識とチートな創造魔法を生かして長年の夢だった喫茶店オープンを目指す。

CHARACTERS

第一話 プロローグ

赤い大きな三角屋根にクリーム色の壁、二階の窓にはフラワーボックス。

「こんなもんなあ？」

私は自作のスケッチを目の高さまで持ち上げ満足気に呟いた。奄美根花欄、それが私の名だ。なんで三十路にもなってお絵描きなんぞしているかというと、理想の未来を掴むためだ。

自分の欲しいものを描くことによつて頭の中にイメージを擦りつける。私が描いたこの家は、長年の夢を叶える場所。

そう、私には夢がある。

その夢とは小さな喫茶店を開くことだ。

場所はあまり都会すぎないこと。

でも、あまり田舎すぎても人が来なければ経営もままならないよねえ。

ならば別荘地とか？

でも、あまりに有名な別荘地だと土地代が高そう。

様々なメリットとデメリットを思い描きながら妄想を発展させていく。そんなひと時は私の唯一

の癒しだった。

私の母はシングルマザーだった。母一人子一人の生活は裕福とはいえず、そうそう欲しいものを手に入れることはできなかったけど、母は月に一回だけ外食に連れていってくれた。それは私にとって唯一の楽しみだった。

母も私も美味しいものを食べるのが大好きで、新しいお店の情報が入る度に一緒に訪れた。母は一度料理を食べただけでその材料を推測できるという特技があり、気に入った料理があると度々再現してくれた。

そして、その特技は私にも受け継がれたようで次第に自分で作るようになり、それが将来の夢に反映されることになった。

転機が訪れたのは母が病気を患い、私が高校を卒業する前に呆気なく亡くなってしまった時だった。

母が残してくれた保険金ですぐにお金には困らなかったものの、私の生活は一変した。

叔母と一緒に暮らすことを提案してきたが、それが義務感からであることをすぐに察知したので断った。気を遣って生活するよりも自由を求めたのだ。もちろん、生活費の援助も断った。

すると叔母は心なしかホッとしたように見えた。いくら姪でも叔母にも子供が二人いるし、私を養うほど生活が楽なわけでもなかったのだろう。それに叔父である叔母の夫に対しても後ろめたさがあったのだと思う。

色々考えて私は自分の好きな道を進むことにした。母の死を見て、どうせ生きるなら好きなことをして後悔しないようにしたいという思いが強くなったのだ。

食べることも料理を作ることも好きだった私は、料理学校に進学することに決めた。その時はまだ明確な目的があるわけではなかったが。

学校が長期休暇に入る度に食べ歩き目的で様々な土地を巡った。海外では今まで食べたことのない料理に出会い、自分でも作ってみたいと心が逸った。

どの土地を訪れても共通していたのは、美味しいものを食べている人はみんな笑顔でとても幸せそうな顔をしていたことだ。

旅先で幸せそうな笑顔に出会う度に自分も幸せを感じた。もし、私の料理で誰かを笑顔にできたなら……次第にそんなことを考えるようになった。

そうして私に明確な夢ができた。いざれたくさんの人々を笑顔にする美味しい料理を提供できるお店をオープンすることだ。

その夢を叶えるため、料理学校を卒業するとすぐに洋食レストランに就職した。

仕事は忙しかったが、終わった後は自宅のアパートで寛きながら自分が将来オープンしたいお店に思いを馳せるのが日課だった。

店構えは三角屋根の可愛らしい建物がいい。

甘いもの好きな私にとってスイーツは欠かせない。

手作りスイーツは持ち帰りができるようにしようか。

洋食もいけど、和食も捨てがたい。

頭の中に様々な思いが巡り、考えただけでワクワクが止まらなかった。

結婚を考えたことがなかったわけではないが、なぜか良縁には恵まれなかった。というのも、いつも裏切られてばかりだったからだ。独身だと思つて付き合ったら奥さんがいたり、二股をかけられたり、浮気されたりと散々だった。

その度に打ちひしがれ、心の中に見えない傷が蓄積されていき、いつしか一生の伴侶を持つという未来は私の中から消えていった。

きつとそれも私の夢の実現を加速させたのだろう。

四十も間近になり、そろそろ自分のお店を持つとかと考えていると願つてもない話が舞い込んだ。馴染みのお客さんが私に耳寄りな情報を持ってきてくれたのだ。

街から外れた場所ですんなり喫茶店を営んでいた老夫婦が歳のため、介護サービス付きの高齢者用マンションに移るとのことだった。老夫婦には子供がいたようだがその店を継ぐ気はなく、結局売ることにしたそうだ。

話を聞くと、街外れとはいえ相場よりかなり格安に思えた。

内覧に行つて初めて見た物件は、思い描いていた三角屋根のお家とはちよつと違うけど、住居も併設されているので問題なかった。

思い立ったが吉日。

私はすぐに準備に取りかかった。

そして、今まで住んでいたアパートを引き払い、引越しも済ませ、開店準備に奔走していた時だった。

その時私は漸く最後の買い物を終え、ワクワクした気持ちで軽ワゴン車を走らせ、やっと手に入れた小さな自分のお城へ向かっていた。

慣れない車の運転の上に舞い上がった気持ちで気も漫ろになっていたのかもしれない。

突然林から飛び出してきた大きめの白い猫。

僅かな反応の遅れ。

まずいっつっ!!!!!!

それでも私は咄嗟にハンドルを切った。

車は脇道に逸れ、急な下り坂になっている林の中を彼方此方ぶつかりながら、引力に引きずられるが如く落ちていく。

ガタガタと地面から響く振動に為す術もなく、徐々にコントロールを失っていった。

ガツガツガツ!! ドツガツシャーーン!!!!!!

激しい衝撃が体中に響き、シートベルトが胸に食い込み、痛みを感じると同時に意識が飛んだ。

意識を失う直前に頭を過ぎったのは「綺麗な器を買ったのに割れなかったかしら？」というしょうもないことだった。

フワフワ揺れる感覚。
身体が温かいものに包まれた。

徐々に覚醒していき、瞼を開けると周りは真っ白な空間だった。

自分が立っているのか、座っているのか、横になっているのかも分からない。
ただ、その白い空間に浮かんでいるという感じだ。

なっ、何？ ここはどこ？
辺りを見回す。

『申し訳ない……………』

突然、頭の中に声が響いた。

どこから聞こえるのだろうかと考えの間もなく、頭上から一匹の白い猫が私の目の前に現れた。
猫は空中に浮いていて、私も多分空中に浮いている。

空中といっても地面が見あたらないので白い空間にふよふよしている感じだ。
もふもふの長い毛足。

金色の瞳のその猫は、普通の猫の三倍以上の大きさだった。

『誠に申し訳ない……………』

大きな猫ね……………そんなことをボンヤリ考えていると、もう一度頭の中で声が聞こえた。

どうやら目の前に浮いている猫が発している声らしい。

状況がいまいち掴めなくてすぐに返事をする事ができない。

「えっとお……………いま喋ったのってあなた？」

『そう、某である』

私は漸く声を絞り出した。でも、返ってきた言葉はなんだか時代がかった言い回しで、なんて返したらいいのか分からない。

『あらあら、いきなり謝ってもなんのことか分からないわよ。まずは状況説明からしなくちゃダメじゃない』

突然のんびりした高い声が頭の中で響いたと思ったら、今度は猫の後ろに見たこともないほど美しい女性が光の中から現れた。古代ギリシャ人が身につけていたような白い服を纏っている。

確か、キトンと呼ばれる長い布を身体に巻き付けるようにして着る服だったと思う。

足首まで伸びたストレートの銀髪に金色の瞳を持つその女性は、この世の者とは思えないほどに神々しい。

大きすぎない胸に引き締まったウエスト、八頭身のモデル体型は女性なら誰もが憧れるプロポー

シヨンに違いない。

綺麗な人ねえ……

いまひとつ状況を掴めない私は、ただ呆然と現実離れた美しい女性を眺めるだけだった。

『初めまして、私はアステイアーテの女神ラシフィーヌ。あなたはこの子のせいで命を落としてしまったの。この子は私の眷属で神獣のグレン。本当にごめんなさいね』

アステイアーテって何？ 女神って？ しかもこの猫は神獣で白いのにグレー、じゃなくてグレーというらしい。

いやいや、もっと重要なことを言っていたわね。私が命を落としたって……

現実味を感じない中で私は漸く事態を把握し始めた。

「えっ？ 私、死んじゃったの？ えっ？ なんで？」

『あなたは車の運転中に突然林から飛び出したこの子を見つけようとして事故にあったの』

私の疑問に女神様は眉尻まゆじりを下げて悲しそうに言った。

私の中に、この場所に来る前の映像が映画のワンシーンのように蘇よみがえった。そうだ、私は車の運転中に……

あの時……私、本当に死んじゃったんだあ……

ショックを受けた。

だって、私の夢は実現目前だったから……

目の前が真っ暗になった。

いや、実際は真っ白なのだが……

『どうやら思い出したようね。それでね、あなたは本当は死ぬはずじゃなかったの。それに神獣は普通、地球の人間に見えるはずはないのよ。でも、なぜかあなたはグレンを認識して避けようとしてしまったの』

「えっ？ じゃあ、本当は避けなくても大丈夫だったの？」

『ええ、神獣だから車に轢ひかれて死ぬなんてことはないわ。精神生命体だから……そう、今のあなたや私と同じようにね』

「まじでか？」

私は女神様の言葉に哑然あぜんとした。

じゃあ私はなんで死んだの？ これじゃあ無駄死にじゃない？

なんともやるせない気持ちのまま言葉を失った。

でも、不思議とその白い猫に対しての怒りは芽生えなかった。

多分、私が猫好きだからかしらね。

私はグレンの方に目を向けて苦笑した。

女神様が私の様子を意に介さずに言葉を続ける。

『それでね、提案なんだけど、あなた私の世界でやり直さない？ もちろんあなたの夢を叶えるた

めにできるだけのことをするわ』

女神様の唐突な提案にまたまた私は言葉を失う。

うん、意味分からんわ。やり直すってどういうこと？ 生き返るってこと？ それとも生まれ変わるってこと？

疑問がどんどん湧いてくる。

『私が管理する世界にあなたを転移させて、あなたが失った夢のお手伝いをするわ。そうね、その前に私が守護しているアステイアーテについて説明するわね』

私の様子をよそにニツコリと微笑む胡散臭い女神様。

笑顔は輝くばかりに目映いけどね。

なんて言っている場合ではない。

ハッキリ言って何を言っているのか分からない。

話が突飛すぎて突っ込むに突っ込めないのだ。

女神様は呆然とする私に構わず話を続ける。

『アステイアーテはこの地球とは違う世界なの。つまり、あなたたちがよく言う異世界ということね。アステイアーテの文明はこの地球よりも大分遅れているの。なまじ魔法があるせいで科学が全然発展しなかったのよね。だから、アステイアーテの発展を促すために地球を参考にしようと思っ
て、グレンを視察に行かせていたんだけど……』

言葉を詰まらせた女神様は伏し目がちに続ける。

『神獣であるグレンはアステイアーテの人間ならともかく、地球人のあなたには見えるはずがないの。でも、あなたの目にはグレンが映ってしまった。もしかしたら、あなたは遙か昔にアステイアーテ人として生きていたことがあるのかもしれないわね。稀にあるのよね。他の世界の魂が混じってしまうことが……』

女神様は私の方を見て苦笑した。

いやいや、軽く言っているけど稀にでもそんなことがあつてはダメなんじゃないの？

そう思ったけど、ここで突っ込んで話が進まないでスルーした。

女神様の話はさらに続く。

『まあ、それはともかくグレンが不用意に地球で遊んで……じゃなくて、視察していてそうだったのは、私の監督不行届きであることに変わりはないわ。だけど、アステイアーテの女神である私は地球に干渉できないの。でもアステイアーテにならあなたの魂を転移させることができると思うの。転移したら記憶を持ったままだから、夢を叶えることができると思っわ』

今女神様つてば、遊んでつて言ったよね。いや、そんなことより肝心なことを聞いておかなきゃならないわね。

「えーっとお、もし断った場合はどうなるの？」

私は戸惑いがちに女神様に尋ねた。

『あなたの魂は永遠に彷徨うことになるわね……多分……』
「多分って……曖昧すぎやしません？」

『仕方がないのよ。初めての事例だから……』

困ったような顔を向けるラシフィアヌ様は口をつぐんだ。

永遠に彷徨う……一人ぼっちで？ つまり、以前聞いたことのある浮遊霊ってやつ？

私は、誰にも気づいてもらえず終わることのない孤独に耐える自分自身を想像しただけで死にたくなかった。

もう死んでるけど……

ふうっと溜息をついてなんとか気持ちを落ち着かせた。

それにしても、地球でもおなじみの言葉を使い回す女神様は妙に軽い感じがする。

きつとかなりの地球最層のせいなんだろうけど……

それはそうと、転生するにも転移するにも疑問はできるだけ解消しておきたい。

私は女神様にさらに問いかける。

「アステイアーテに魂を転移させるということは、生まれ変わって赤ちゃんから人生を始めるということなの？ 地球での私は死んでしまったし……」

『地球の魂をアステイアーテの輪廻の輪に入れるには、きちんと前世の生を宿命通りに終えてから双方の神同士で協定を結ぶ必要があるから無理ね。だから、魂が抜けた身体を拝借することになる

わね』

「えっ？ 魂が抜けた身体って死んだ身体……つまり死体ってこと？」

『大丈夫よ。魂が抜けたばかりの新鮮な身体を選ぶから〜』

「えっ？ そういう問題？」

相変わらずのんびりした口調のまま、なんとはなしに言葉を発する女神様に不安が過ぎった。

大丈夫かしら？

『そうねえ、この子なんてどうかしら？』

私が不安に思っていることなどお構いなしに女神様が話を続け、目の前にスクリーンのようなものが現れた。

そこには、薄紫色のワンピースを纏った藍色の髪の少女が、荒れ果てた地に仰向けに倒れていた。ワンピースは汚れ、ところどころ破れているようだ。

痩せこけた頬に落ちくぼんだ目の周りは隈になっているが全体的に整った顔立ちだ。

子供が身近にいなかったから見ただけじゃ分からないけど、どう見ても十歳以下に見える。

動く気配を微塵も感じさせない少女は、きつともう生きてはいないのだろう。

「ねえ、女神様。どうしてこの少女を助けてあげなかったの？」

『生きる意志が強ければ私もなんとかできたんだけど、この子は生きることを拒否したの。生きるのを諦めてしまった者はどうすることもできないの。でも、大丈夫。この子の魂が次の人生で幸せ

になれるようにできるだけのことをするつもりだから……』

女神様は哀愁を帯びた微笑みをこぼした。

『だから、あなたは安心してこの身体に入って自分の夢を実現すればいいのよ』

私は女神様の言葉を受け、考えを巡らせた。

『もちろん、転生したらすぐに生活に困らないように住居を準備するわ』

「住居？」

『そうよ、なんてったって私はアステイアーテの女神だからね。この世界ではそれなりの力があるのよ。それに私の加護の他に恩寵も授けるわ』

どうやら好待遇で転生できるようだ。

『今なら前世の記憶の他に天寿を全うする宿命も付け加えるわ。それにこの子は孤児だから自由に生きられるわよ。それで、どうする？ この子の中にあなたの魂を転移していいかしら？』

なんだか「今ならお得」みたいな前世のテレビショッピングのような言い回しんだけど、ますます不安が湧き上がるのは気のせいだろうか？

女神様の言葉を反芻して不安を払拭させるべく考える。

私は夢の実現を目前にして命を失った。

たとえ異世界だとしても永遠に彷徨うよりも転移させてもらった方が絶対がいい。

しかも魔法があるファンタジーな世界だ。そう思うとなんだかワクワクしてきた。

でも、魂を転移させてその子の身体に入ることとは転生ということではいいのかしら？ そんな疑問が過ぎつつが、私は無意識に声を発していた。

「お願いします。あつ、でも……………」

私が了承の声を発した瞬間、光が私を包み意識が何かに吸い込まれるように消えていった。

「いや、いきなりかよ！」

意識を失う直前に私が発した言葉は女神様に届かなかった。

第二話 異世界転生

生温い風が頬を掠るのを感じた。気がつくと、灰色の世界で仰向けに寝転んでいた。辺りを見渡すと樹木は枯れ、ところどころが白い霧で覆われている。荒廃したその景色はこの世の終わりを告げるかの如く絶望感が漂う。

呆然と周辺を見回した私は、女神様の言葉に頷いたことを後悔せずにはいられなかった。

それにしてもないわあ。

だって信じられる？ この身体の持ち主のこと、なんの説明もなかったんですけど！

どこの誰かも分からないんですけど！ 多分十歳前後の少女だと思うけど、年齢さえ分からな

いつてどういうこと？ それにここはどこ？ この世界、もう終わってるんじゃないかしら？

女神様は私の考えが変わらないうちに転生させたかったのかもしれないわね。それだけ私をこの世界に転生させたかったのは、何か思惑があるのかしら？

もしかして、まんまと女神様の罠にはまったのかもしれない。なんかあの女神様怪しかったし……

まあ、ここでグダグダ怒っていても仕方ないので、とりあえず自分の身体を見回してみる。特に怪我はないようだ。

シンプルな薄紫のワンピースはどこどころ泥のようなものが付いていて破れた箇所もある。胸まである藍色の髪はくすんで毛先はパサパサ、薄汚れた身体。長い間お風呂にも入っていない感じだ。

それに手足が細すぎる。食事もまともに取っていなかったに違いない。

「多分、死因は餓死ね……」

私は身体の状態から死んだ原因を推測した。はあ……これからどうしろって言うのよ！ と思っ
ていたら救世主が現れた。

『無事に転移できたようだな奄美根花欄、いや、この世界での名をなんと呼ぼうか？』

頭に響いた声に反応し、顔を上げると白い猫が目の前でふよふよ浮いていた。あの白い世界で見
たより小さい。そう、普通の猫サイズだった。

「あっ、私が前世で死んだ元凶の猫ちゃんだ！ 確かグレンだったわね。そうね、カリンでいい
わよ」

『ぐっ……そっそうか。ではカリン、その節は誠にすまないことをした。某には心の中で話せば声
に出さずとも通じるぞ』

「えっ？ そうなの？」

『そうなの？』

グレンの言葉に心の中で言い直した。

うん、でもなんかしっくりこないわ。

だから普通に声に出して話すことにした。でも、周りに人がいて聞かれたくない話の時は念話で
話すことにしよう。

「でもグレン、私あまり根に持つタイプじゃないからもう気にしなくて大丈夫よ。それにしてもな
んでグレンまでここに来たの？」

『カリンだけではこの世界で生きるのは難しいのではないかと、某が守護に付くことになった。
元々は某のせいでカリンがこの世界に転生することになったのだ。幸せに導くのが某の責任でもあ
る故な』

「本当に？ ヤッター！」

私は一瞬驚いたが、思わずグレンを抱きしめてしまった。一人で急にこんな世界に飛ばされて、



かなり心細いと感じていたから嬉しさもひとしおだ。いくら前世では四十歳近くまで生きていたとはいえね。

『こらこら、とりあえず落ち着け。苦しくて敵わん』

『あつ、ごめんねえ』

『まずはこれを飲むがよい。その身体は餓死したのだ。先に体調を整えねばならん』
グレンの言葉が私の中に届くと同時に、目の前に水の塊が現れた。

『この水は何？』

『神域にある命の泉の水だ。其方そなたの生命を維持することができる。其方の身体は限界だ。これを飲めば少しは回復するだろう』

『へえ、丁度喉が渴いていると思っていたの』

私はそう言って水の塊に口を付けてゆっくり飲んだ。そして、その味にビックリした。

『仄ほかに甘くて美味しい！ 身体に染み渡るようだわ！』

『そうだろう、そうだろう』

命の泉の水を飲んだ途端、体中感じていた怠だるさが嘘のように消え、力が湧いてくるようだった。空腹感も治まっている。

『これで大丈夫だろう。身体は飢餓状態から脱したはずだ』
満足気にグレンが呟いた。

それにしてもこの身体の持ち主は何者だろう？ 女神様は孤児だと言っていたけど、たとえ両親が亡くなったとしても出自くらいはあるはずだ。

『それと、後ほどカリンのその身体の身元を伝えよう。先ほど、その身体について何も説明がなかったと言っていただろう』

「えっ？ もしかして私声に出して言っていたかしら？ あつても身元についてはまだ知らなくていいわ。なんだか嫌な予感があるから。多分知らない方がいいような予感が……じゃあ年齢だけ教えてくれる？」

私は平和に過ごしたいのだ。余計な情報を得て惑わされたくはない。知らない方がいい情報があるのは前世でも経験済みだ。心の平穩のために知りすぎない方がいいこともあるのだ。

とはいえ、情弱すぎてもダメなんだけどね。そこんところのさじ加減は難しいのよねえ。

『そうか、その身体は八年の歴史を刻んでおる。先月の初風月三日の日に誕生日を迎えたばかりだ』

「初風月？ よく分からないけど、思ったよりも幼いみたいだわ」

『この世界はカリンの前世と同じ十二月の月で一年となる。その十二月の月とは、冬の季節の初水月、次水月、春の季節の参水月、肆水月、初風月、次風月、夏の季節の参風月、肆風月、秋から冬の季節の初陽月、次陽月、参陽月、肆陽月である。そして、週は六日、一月は五週間で三十日になる。因みに一日は地球と同じ二十四時間だ』

「ふーん、日本と少し似ているわね。先月が初風月なら今は次風月で春の季節ということね」

『まあ、暦など人が作ったもの、我らにはあまり意味はないのだが……』

私は説明を受け、そんな暦覚えられんわ、と心の中で思ったがとりあえず自分の……この身体の……生まれ月くらいは記憶しておくことにした。

—— 初風月三日の日が私の誕生日と。

『さて、それでは参ろうか？ 某の背に乗るがよい』

グレンはそう言うと二メートルくらいの大きさになり、背には一對の白い羽が天に向かって出現した。そして、私がいよいよように屈んでくれた。

「えーっ！ 羽が生えた！ それにグレンって大きくなれるんだね。やっぱり神獣なんだね！ ところでどこに行くの？」

私は目を丸くして驚きながらグレンに尋ねた。こうして見ると、もはや猫というよりも白くて羽が生えた大きな豹にしか見えない。

『其方の夢の家だ』

夢の家？ はて？ 私の頭の中ははてなマークでいっぱいになったけど、とりあえずグレンの背に乗った。こんな不気味な場所にいつまでもいたくない。

グレンのもふもふの背中はとてもふかふかして温かい。周りの景色が見えなくなるほどの速さで進むけど、なんらかのガードが施されているのか私の顔に強い風が当たることはなかった。

「ねえ、グレンって神獣で精神生命体だったよね。なんで私グレンに触れて、こうして乗ることができるの？」

『ああ、それはだなあ、この世界は地球ではなくアステイアでラシファイヌ様の神力が及ぶ場所だからだよ。神力にこの世界のエネルギーを圧縮させて肉体に変換させているのだ』

「ふーん、そうなんだ」

グレンの背中に乗りながら、なんとはなしに不思議に思ったことを尋ねた。グレンの言っていることは分かっていたような分からないような感じだけど、そういうものだとして理解することにした。

景色がハッキリ見えないほどの速さで走り続けるグレン。

灰色の景色はいつの間にか緑色が多くなっていた。どれくらいの距離を走り続けてきたのだろうか？

徐々にグレンの走る速さが緩んで遠くには木々が生い茂っているのが見えてきた。

草原の向こうにはどうやら森があるようだ。空は雲一つない青空が広がっており、地球の空とやら変わらない。とてもここが異世界だなんて俄には信じられない風景だ。

どうやらこの世界の全てが最初に見た景色の通りというわけではなかったようだ。あの景色がどの場所か分からないけど、そのことに少し安心した。

纏う空気が肌に伝わり温度を感じることができた。

陽の光が明るい割に気温はそれほど高くない。太陽が真上にあることを考えると時間は昼前後の

ように思える。

ぐんぐんと森が近づいてきた。近づいているのは私たちの方なんだけどね……

気がつくとも視界が木々で埋め尽くされていた。森の入り口からは幅二メートルほどの、土を踏み固めたような道が見える。そこから森の中に入り、途中から分かれた細い小道を進んでいく。

よく見ないと見落としそうなくらい細い道だ。

少し進むと、目の前の木々の間に赤い大きな三角屋根に白い煉瓦の家が現れたのだった。

「こっ、これは……………」

私はグレンの背中に乗ったまま、目の前に現れた赤い三角屋根の家の前で言葉を失った。

正面は店舗の入り口で両開きのドアになっているようで、前世で私が夢に描いていた家にそっくりだった。二階を見ればそこもまた私が描いていた通り、ちゃんとフラワーボックスまである。

フラワーボックスには、ここからでは種類が分からないけど黄色と紫の花が見える。二階は住居になっているのだろう。私の理想を再現したような建物に心が躍る。

『ラシファイヌ様が準備してくださったのだ』

「ラシファイヌ様？ ああ、あの胡散臭……綺麗な女神様ね」

『そうだ、其方の夢の記憶を見て理想の家を創造してくださったのだ。家の中の機能もカリンの記憶を読み取って完備してあるからすぐに住めるぞ。ラシファイヌ様は創造の女神様故』

「え？ そうなの？」

目の前の可愛らしい建物を見つめ、言葉にできないほど感動した。瞳が潤んでしまうのを抑えきれない。

私は、ここに来て初めて心の中で女神様に感謝の言葉を告げた。

——ラシフィーヌ様、ありがとうございます。

『この家は結界が張られており害意を持つ者には見えないようになっておる。では、早速中に入れて確かめるがよい』

私は、グレンの言葉を受けて、正面にある赤銅色の両開きドアに手をかけた。ふと見るとドアには「クローズド」と書かれたプレートがかかっていた。裏返してみると「オープン」という文字が書いてあった。

このプレートのオープンの方を表面にすると、森の広い道からこの家に繋がる小道の分岐点にこの店への案内板が現れるようだ。

『この家自体が魔導具のようなものだ』

「魔導具……」

グレンの言葉を聞いて、魔導具という異世界らしい言葉に期待感が膨らんだ。きつと傍から見ると、私の瞳はキラキラと輝いていたに違いない。

ラシフィーヌ様は本当に私の夢を叶えるために尽力してくれたみたいだ。

「あれ？ 私、この世界の文字が読める？」

『それはカリンの身体の記憶であろう。文字も読めるし、言葉も分かると思うぞ』

グレンは、身体に刻み込まれた記憶はたとえ魂が抜けても消えることはないと言った。

そういえば前世でも生体移植をする時、記憶転移といって臓器移植の提供者の記憶の一部が受領者に移るという現象を耳にしたことがある。それは、記憶だけではなく、趣味、嗜好、性格などもドナーの影響を受けるといふ。

そう考えると、もしかして私もこの身体が持つ記憶の影響を受けるのだろうか？

「今考えても答えが出るわけではないし、後で考えよつと」

思考の海に沈みそうになった意識を現実に戻して、家の中に足を踏み入れた。

この家が私の物だと思うとワクワク感が止まらない。

グレンは普通の猫サイズになってから私の後を付いてくる。

中に入ると三畳ほどのエントランスがあり、その先に白い両開きの内扉があった。

左右には男性用と女性用のトイレがある。

掃除が大変だなあと呟くと、グレンが『この家自体に自動洗浄機能が付いているから掃除の必要はない』と言った。

ブラボー！

思わず心の中で叫んでしまった。

私は料理は得意だけど、掃除があまり得意ではない。なんとありがたい機能だろうか。

それだけで私の中でこの家の価値が数段上がったのだった。

白い内扉の両側には、花を模した淡い彩りのステンドグラスがあり、おしゃれな雰囲気醸し出している。

内扉はスイングドアで、押して手を離すと元の位置に戻るタイプだ。

スイングドアを押し開けて中に入ると、八畳くらいの広さの店内に四人がけの客席が三セット、その奥にカウンターテーブルがあり対面で調理をするようになっていた。

カウンターテーブルには五つの足の長い椅子が置かれている。カウンターテーブルの左側には調理スペースへの入り口、その反対側にはケーキを陳列するためのガラスケースが置かれていた。

ここに持ち帰り用の手作りケーキを並べて販売できるようだ。

調理台は前世でもおなじみのシステムキッチン仕様。そして、その後ろにカップボード、その中央には茶色い煉瓦のオーブンが存在を主張していた。

店内は私が前世でオープン間近だった店の造りにそっくりだった。

調理スペースの奥には左右の壁に沿うように下がり壁で仕切られた一間ほどの空間があり、右側には八畳くらいのパントリー、左側には六畳ほどの部屋に二階へ上がる階段がある。

パントリーが家庭のものより広めなのは、お店を営むためには色々とストックしておく物が多いからだらう。

パントリー内には銀色の二つの扉があった。ステンレスのような金属で作られているように見え

る。実際にはどんな素材かは分からない。異世界だし……

『左が食品庫で右が調理魔導具。カリンの前世で言う電子レンジのようなものだ』

グレンの説明を受けて見てみると、魔導レンジ（勝手にそう呼ぶことにした）にはつまみみたいなものと赤、青、緑、黒の四つのボタンが付いている。

「このボタンは何かしら？」

『赤が温め、青が冷やし、緑が乾燥、黒が熟成だ』

「まあ、電子レンジよりも優れているのね」

『ラシフィーヌ様がカリンの記憶にあつた電子レンジにもつと機能を付けてアレンジしたのだ』

これはいい！ 温めたり、冷やしたり、さらに熟成によって発酵食品が作れる！ と思う。

まずは、味噌と醤油よね。日本人としてはこれは外せない。でも難しいかなあ？

それと、梅干しに、漬け物……

色々作りたい物を頭の中で考えながら他の場所も確認していく。

収納棚には見覚えのある調理器具類と食器が収納されていた。

フードプロセッサーにミキサーのような物まである。さつきグレンが私の記憶にあつたものを読み取って再現したと言っていたから、多分機能は予想通りに違いない。

でも、前世と違うのは電気で動くのではなく魔力で動くということらしい。

パントリーの手前の左側の壁には勝手口らしきドアがある。普段はここから出入りするらしいだ

ろう。

その反対側の六畳くらいの部屋には丸テーブルと棚があり、ここは休憩スペースのようだ。その奥には螺旋階段があり、早速二階に上っていく。

二階はやはり住居スペースのようだ。階段を上った先には白い木でできたシンプルな三つの扉があった。まずは左にあるドアを開けてみた。

六畳ほどの広さに本棚と机、それに小さめのソファセットが置かれており、どうやら書斎のようだ。

そういうえば、前世で夢の家を妄想していた時、仕事部屋が欲しいなあと考えていたことを思い出した。もしかしたらそのことが反映されたのかもしれない。

次に真ん中の部屋のドアを開けた。

そこにはセミダブルほどの大きさのベッドがあり、クローゼットにドレッサーまであった。ここは寝室だろう。

では、転生してから気になっていた自分の容姿を確認することにしよう。白木に花の彫刻が施されたドレッサーに近寄り、鏡を覗く。

藍色の髪、瑠璃色の瞳は明らかに日本人にはない色だった。

命の泉の水のお陰で多少は回復したものの、頬は瘦け、目は窪み、手足はやせ細って明らかに栄養失調気味だということが分かる。それにしても綺麗な瞳だ。

ちゃんと栄養を取って年相応の身体になれば、それなりに美少女になるだろう。今着ている服は襦袢だし、髪の毛や肌は汚れてくすんでいるが……

うーん、お風呂に入りたいなあ。

衛生天国日本に住んでいた私としては、この汚れは耐え難いものだった。でも、とりあえず家中のチェックを続ける。

グレンは色々説明しながら私の後ろを付いてくる。

「着替えとかあるのかしら？ さすがにこの服は汚れすぎだから着替えが欲しいんだけど」

『ならばそのクローゼットとタンスの中の物が役に立つぞ』

私はグレンの言葉を受けてクローゼットの扉とタンスの引き出しを開けてみた。

クローゼットやタンスの中には何やら白い糸玉がたくさん積まれていた。

え？ 意味分からないんですけど……

私は糸玉を手に取りジッと眺めた。どう見てもただの糸玉だ。

「何これ？」

『それは女郎蜘蛛の糸だ。ラシフィーン様からの贈り物の一つだ。その糸で好きな衣服をこしらえるがよい』

女郎蜘蛛？ ギリシャ神話ではあの闘いの女神アテナに蜘蛛にされて延々と機織りをし続けることになったあの女郎蜘蛛？ とは関係ないかあ。で、糸から服って意味分かんないんですけどお！

それにしても、それってつまり蜘蛛の糸、ということよね。いや前世では芋虫……正確には蚕……の繭から作られた絹も高級品としてあったから問題ないのか？

ふと我に返り、肝心なことをグレンに尋ねることにした。

「どうやって服を作れと？」

『ラシフィーヌ様から恩寵を授かったカリンなら、魔力を使って創造の魔法が使えるはずだ』

「えっ？ 魔法？ 私にも魔力があるの？」

『この世界の者には少なからず魔力が宿っている。カリンも例外ではない。いや、それ以上にラシフィーヌ様の恩寵により、カリンの魔力は他の者よりも強いと言える。転生させる際に、ラシフィーヌ様の魔力が付与された故、殆どの生活魔法と創造魔法が使えると思うぞ』

「まじで？」

グレンの言葉に私の目は輝いた。私にも魔法が使える。

前世ではファンタジー世界の定番だった魔法……なんて夢のある響きだろう。それが私にも使えるなんて……しかも生活魔法に創造魔法……

生活魔法とは普通に生活するための魔法で、火を出したり水を出したり明かりを点けたりできる魔法らしい。創造魔法とは物を作る魔法だということだ。でも女神様と違って、必要な材料がなければ作ることはできないみたい。

「どうやって魔法で服が作れるの？」

『自分の中にある魔力の流れを感じるのだ。そうだな、前世で言うところの「丹田」に何かを感じないか？』

私はグレンの言葉を受けて目を瞑り丹田を意識した。

丹田は三方所。額にある上丹田、胸の真ん中辺りにある中丹田、下腹部にある下丹田である。身体を中心に垂直に並んでいるのだ。

私は前世でダイエットのためにヨガをしていた時にこの丹田について学習した経験がある。なんせ、食べ歩きが趣味だったのでダイエットは切実な問題だったのだ。ヨガでは下腹部にある下丹田を意識して呼吸する。

そのお陰かは分からないけど、丹田を意識するとそこを中心に僅かな熱を感じた。

「なんか身体の中から熱が帯びてくる感じがするわ」

『それが魔力だ。魔力を感じたら手のひらに流すように導き、魔力を集めるのだ。ゆっくりと』

身体の中から湧き上がる熱に集中する。手のひらを上にして両腕を肩の高さに持ち上げると熱が移動し、魔力が集まってくるのを感じた。目を開けてみると手のひらが光を纏っていた。

『よし、魔力が集まったようだ。それでは、自分の欲しい物を頭の中で描くのだ。できるだけ細かく。イメージが固定したらその手のひらを女郎蜘蛛の糸に向けて魔力を放出するのだ』

私はグレンの言葉の通りに手のひらを糸玉に向けた。

動きやすくて、伸縮性があって着やすい服がいいわね。

私は着たい服をイメージした。

手のひらに纏っていた光は次第に魔法陣のような形になり、徐々に複雑な文様を描き始めた。

文様の構築が終了すると、魔法陣から放たれた淡い光が女郎蜘蛛の糸を包んだ。

女郎蜘蛛の糸が光に包まれ視認できなくなっただかと思っただら、徐々に光が消えていく。

光が消えた場所には私が思い描いた膝上くらいのチュニツクが存在していた。

「できたあー！」

あまりの感動に大きな声を上げてしまった。

それから私は、同じようにスパッツ、パジャマ、下着、タオルなどの基本的な物を三枚ずつ作っていった。

ついでに、今後料理をすることを考えてシンプルなエプロンも追加した。

触れてみてビックリ。肌触りがいいというかよすぎるといふか……もしかしてこの世界の女郎蜘蛛の糸というのは高級品なのかもしれない。絹よりも肌触りがいいような気がするのは気のせいだと思いたい。

だって、絹の下着はともかくとして、絹のチュニツクにスパッツってどんな高級志向なのよって思う。正確には絹ではないけど……

まあ、いいかあ……これしかないんだし。

私は即座にスルーすることにした。

それと室内履き。これ重要。もちろんこれも女郎蜘蛛の糸を使う。これしかないし……(二度目)。今はこの身体が最初から履いていた革の靴のままだった。汚れているけど破損してはいないようだから洗えばまだ履けるだろう。

元日本人としては、家の中でずっと靴を履いているのはいただけない。スリッパではなくて底を厚めにした踵まである室内履きを創造した。

でも、気になるのが全部白ということ。まあそれは追々考えるとして、私はこの身体に宿ってからずっと気になっていることを解決することにした。

それは元日本人としては耐え難いこと……

身体が異常に汚れていて髪は指が通らないほどベタベタで軋んでいる。

自分自身から嫌な臭いがするほどだ。

これをなんとかしなければならぬ。

そう、お風呂だ。

この家にお風呂、あるよね？ 衛生大国日本で生きていた私としてはお風呂は重大な問題だ。

寝室から出ると右側のドアを開けてみた。右側に洗面台とその隣に洗濯機らしきものがあり、左側にはトイレへのドアがあった。

正面の引き戸をスライドさせると脱衣所らしき空間、さらにその奥にも引き戸がある。

脱衣所の奥にある引き戸……

期待を胸にそっと引き戸を開けると……

えっ？ この匂い……まっ、まさか！ 檜のお風呂！ 竹筒のような物からお湯が出ている。もしかして！

「温泉!？」

『カリンが夢に思い描いていただろ?』

グレンの言葉で思い出した。そういえば、もし家を建てるなら温泉付きがいいなあ、って思ってたわ！ でも現実には難しいから諦めていたのよ。

なんか感動のあまり目がうるうるしてくるのを感じる。

浴室にはちゃんとシャワーも付いている。

「至れり尽くせりね〜」

私はそう呟きながら喜々として寝室に戻り、クローゼットの引き出しからさっき作ったばかりの下着とチュニック、スパッツ、タオルを手に早速お風呂に入ることにした。

「う〜ん、石鹸やシャンプーが欲しいところね。この世界にないのかしら？ 後で作ろうかなあ？ なんて作ったって私には女神様からもらった恩寵があるからね」

それでもなんとか熱めのお湯で身体と髪を洗い、大分サッパリした。

はあ〜。気持ちいい……

なんで温泉に入るとおっさんみたいな声が出るのかねえ？ そう疑問に思いつつお湯に浸かりり

ラックスする。

お風呂から上がると早速さっき作ったチュニックとスパッツを着て室内履きを履く。

お風呂の戸を閉めた途端、中から雨が降るような音が聞こえて一瞬光った。

「雷?」

『いやこれは自動洗浄機能だ。お風呂を使った後勝手にその機能が作動するようになってる。風呂だけではない。家全体に自動洗浄機能、自動空調機能がある』

なんて便利！ ということは、いつでも綺麗で快適な温度で生活できるのね。私は寒さも暑さも苦手だから超嬉しい！ 本当になんて便利！ ラシフィーヌ様、本当にありがとう。私はまたもや胸の前で手を合わせ感謝の言葉を述べた。

さて、身体も綺麗になったし次は腹を満たす必要がある。こんなやせ細った身体だとすぐに死んじゃうからね。

とりあえず、食べ物があるか物色してみるかあ……

私は、グレンと共に螺旋階段を下りて厨房に向かったのだった。



一階の厨房は、前世で開店準備をしていた店舗にあったものと見た感じ変わらないようだ。店の

カウンターを挟んでシステムキッチンに作業台がある。

でも材料がないから何も作れない。

「まずはなんか食べないといけないわね……この家の周りに木の実とか果実とかないかしら？」

別にそんなにお腹が空いているわけではない。今は興奮状態だからなのか、グレンが出してくれた命の泉の水のお陰なのか分らないが。

だからといって何も食べないわけにはいかない。この身体が飢餓状態であることに変わりはないのだから。

悩んでいると不意にグレンが私の目の前に浮かんだ。

『案ずるな。神の庭に行けば果実を手に入れることができる。まずはそこへ行くといいだろう』

「神の庭？」

私はグレンの言葉の意味を掴めず首を傾げた。

『そう、神の庭だ。こっちだ、付いてくるがよい』

なんだか知らないが、グレンが促すので私はその後を黙って付いていく。

グレンが向かったのは、休憩室の奥にあるさつき下りてきたばかりの螺旋階段だった。その螺旋階段の脇を通り過ぎ、奥の壁の前で止まった。

『さあ、この壁に手のひらを当て魔力を流すのだ』

私はグレンの言うままに壁に手のひらを当て目を瞑って集中してから魔力を流した。すると、魔法陣の光が浮き上がり、今まで何もなかった壁に突然白い扉が現れた。

「こっ、これは……」

私はあまりの驚きに声を失った。

『さあ、その扉を開けてみるがよい』

グレンの声を受けて私はそっと取っ手を回し、戸を開けた。すると下に続く階段が現れた。

「地下室？」

グレンは私の問いに頷くと、階段を軽やかに下りていく。私は一瞬躊躇したが、思い切ってグレンの後に付いていった。

階段を下りた突き当たりには銀色の扉があり、心なしか光を帯びているように見えた。

『さあ、この扉に再び手のひらを当てるのだ』

さつきと同じようにグレンに促されるまま、扉に手のひらを当てた。

すると、眩しいほどに扉が光り、目の前には言葉では言い表せないほど美しい景色が広がっていた。

風光明媚。その言葉が真っ先に頭に浮かんだ。

学生の頃、こんな四字熟語使う時あるのかな？ と疑問に思いながら勉強してたけど、あったわ、今。そんなことを思いながら現実とはかけ離れた景色をじっくり眺める。

色とりどりの花々が咲き乱れ、木々には様々な果実が生なっている。太陽は見当たらないのに水色の空からは淡い光が差し、空気がキラキラ輝きらいているようだ。

信じられない。本当に信じられない。私は暫しばく声を出すことも忘れて、その風景に見とれてしまった。あまりにも美しく清浄さも感じるその景色は天国だと言われても不思議ではない。

「えっ？ ここって地下室だよね？」

「ついつい辺りを見回す私。」

『神の庭の一部をここに繋げたのだ』

私の言葉を受けたグレンが答えてくれたのだが、私はあまりのことにすぐに意味を捉えることができなかった。

「えっ？ 神の庭？ だから何それ？」

『其方の食生活を補うためにラシフィーヌ様が用意されたのだ。この場所にはラシフィーヌ様が地球を参考に再現した果実が実っている。とはいえ、あくまでも地球のものをそのまま持ってこられるわけではない。アステイアーテに現存しているもので代用しているに過ぎない。それでも、神の庭で育っているだけで味も栄養価も格段によいのだが』

グレンの言葉を聞いた私は、周辺を見回した。木々には様々な色を纏った果実が風景を彩っている。

『とりあえず、目に留まった果実を食すがよい。カリンに足りない栄養を補ってくれるだろう。そ

れに身体を回復させる効果もあるのだ。因みにこの場所は他の人間が踏み入ることはできない。ラシフィーヌ様の加護を持つ其方だけがここに立ち入ることを許されたのだ。もちろん、神獣である某はいつでもここに来ることができると言うまでもないがな』

なんかそれってとつてもすごいことのような気がする。身体を回復させるって、これはそうそう世に出してはいけない食べ物かもしれない。

でも、今は深く考えずありがたく果実をいただくことにしよう。私の身体は死から蘇ったばかりなのだ。身体の回復は私にとって最重要事項だ。

そう結論つけて神の庭に一步踏み出そうとしたが、ふと気づいた。

「あっ、でも私、室内履きのままだよ」

『心配するでない。そのままでよい。神の庭では汚れることはないからな』

グレンの言葉に安心して神の庭に足を踏み入れた。

木に生っている様々な果実。前世で馴染みのある形のものからちょっと似ているけど僅かに違うものなど様々な種類の果実が生る木を眺めていく。

『これなどどうだ？』

グレンがそう言って口にくわえて運んできたのは、赤く熟したプラムのような果実だった。口元を持っていくと甘い香りがする。私はそれにかぶりつき口に含んだ。瑞々みずみずしく甘酸っぱい味が口の中に広がった。

「美味しい！」

私はそう言うのとあつという間にその果実を食べきってしまった。そこでふと、気づいた。

「あれ？ この果物、種がなかった」

『ああ、神の庭の植物は枯れることもないし、果実をもうでもすぐに同じ場所に同じ果実が生るからな。種は必要ないのだ』

「なるほど」

増やさなくてもなくなることがないのなら、そりゃあ種は必要ないよね。私は妙に納得しながら木々の間を縫うように歩を進めた。

少し行くと開けた場所があり、そこには小さな白い石造りのガゼボが周りの景色に調和するよう存在していた。

様々な色を成す果実の木に囲まれているそのガゼボの中には、白い丸テーブルと可愛い椅子が備え付けてあった。私は近づくと早速その椅子に腰かけた。

『暫し待たれよ』

グレンはそう私に声をかけると、足早に木々の中を駆け巡り、色とりどりの果実をどんどんガゼボの中の白い丸テーブルに置いていった。

「すごい！ 見たこともない果物がたくさんあるのね」

私はこんもりと盛られたうちの一つ、手のひらに乗るほどの楕円形の黄色い果実を取り、香りを

嗅いでみた。仄かに甘い香りに覚えがあるような気がして、思わずそのまま一口嚙ってみた。

「やっぱり思った通りの味だわ！ これも美味しい！」

口の中に広がる甘みは前世で食べたバナナに似ているが、若干スツキリとした後味だ。それでももつたりした食感と香りはバナナそっくりである。

神の庭の果実であるせいか、皮ごと食べてもなんの問題もなく美味しく食べられた。

最後にオレンジ色の小さなリンゴのような果実を食べると、元々小さな身体の私はすっかりお腹いっぱいになってしまった。

十分に果実を堪能した私は、もう一度周りの景色を見回した。天国のような自然に溢れたこの景色、収穫してもすぐに生る果実、本当に神の庭に相応しいといえるこの場所をラシフィーヌ様が私に提供してくれたことに感謝した。

「グレン、ごめんね。せっかかたくたくさん取ってきてくれたのに、もうお腹いっぱい食べられないわ。でも、残したら勿体ないわね……」

『心配無用だ。時間停止機能がある食品庫に保管すれば問題ない』

ションボリする私にグレンがとんでもないことを告げた。

「えっ？ 時間停止機能？」

グレンが言うには、パントリーにあつた食品庫には時間停止機能が付いているらしい。そこに食品を入れておけば、入れた時の状態のまま食品を永遠に保存できるというのだ。

つまり、採れたての果物は採れたてのままに、作りたての料理は作りたてのままに保存できるぞうだ。

そうか、あの食品庫はただの食品庫ではなかったのね。

それにしても家の中が広すぎると感じるのは気のせいだろうか。いや、広すぎるから不満があるわけではない。でも、最初に見たこの家の外観を思い出すと、家の中がこんなに広いのはおかしいのだ。

いや、そもそも神の庭があること自体おかしいのだが。

しかし、それを除いたとしても広すぎるのではないだろうか？

グレンにその疑問を問うた。

「ねえ、ちよつと疑問なんだけど。この家の中って外観よりもなんかとても広い感じがするんだけど……」

『それはそうだろう。ラシフィーヌ様がこの家を創造する際、空間拡張機能を施しておるからな』

「え？ そんなこともできるの？ さすが女神様！」

今さらながらにラシフィーヌ様のすごさを実感した。

——ラシフィーヌ様、重ね重ねありがとうございます。胡散臭いと思つてごめんさい。

私は心の中でラシフィーヌ様にお礼と謝罪を述べながら、グレンを伴つて多すぎる果物と共に厨房へと向かった。

因みに果物は持ちきれないので魔法で浮かせて運んでいる。

魔法……便利すぎる。



「平皿、スープ皿、コップがそれぞれ一個ずつあるわね……これもラシフィーヌ様作よねえ……」
パントリーの棚を一段ずつ確認していると、目の前の棚の上に黒くて平べったい板のような物が置いてあることに気づいた。

スマホの倍くらいの大きさで角が少し丸くなっている。片手で簡単に持ち上げられ、とても軽い。棚に置かれていた時は黒く見えたのに、手で持つと若干透き通つて見えた。

「なんだろう？ これ……」

『それは情報を得るための魔導具だ』

「えっ？ 魔導具？ もしかしてスマホみたいな物？」

『まあ、似ていると言えは似ているかもしれないが、通信機能は付いていない。その板に魔力を流し、知りたいことを心の中で唱えれば教えてくれるのだ。アステイアーテの情報も地球の情報も得ることができろぞ。地球に関しては某が五千年ほど調査した故、情報量は十分であろう』

私が小首を傾げて疑問を投げかけると、グレンがすぐに教えてくれた。

それよりも、グレンが五千年も前から地球に来ていたことに驚いた。地球のことを私より知っているんだろ。特に私、歴史が苦手だったし……

でも、このタブレットみたいな魔導具があれば情報を取得できるから問題ないわね。

さて、それでは早速タブレットに聞いてみよう。

まずは……

——私が今いる場所はなんていう国かしら？

私は一番気になっていることをその魔導具に向かって心の中で唱えた。

ティディアル王国。人口三千万人。人口、面積共全世界第三位。

「へえ、私ってばかなりの大国に転生したのね」

——私がいるこの森について教えて、そうね、場所とか名称があれば。

ティディアル王国の王都グレサリアから南へ馬車で五日、タングステン領の東、ヨダの町の近くにある森でガイストの森と呼ばれている。

「なるほど、なるほど。ということは、ここから一番近い町がヨダの町ということね。王都から

結構離れた場所のようだから、それほど大きな町でもないのかしら？ 色々落ち着いたら行ってみ

よーっと！ それにしても地図まで表示されるなんて至れり尽くせりね」

私は、タブレットみたいな魔導具を見つめ口角を上げた。

さらに、色々この世界やこの国のことについて調べた。そのお陰でこの世界やこの国の基礎知識が備わったのではないかと思う。

この世界には大きく分けて三つの大陸がある。その中でも最も大きな大陸、テネシン大陸にある国がこのティディアル王国だ。ティディアル王国はこのテネシン大陸では二番目に大きな国だ。では、この世界で最も大きな国はというと、大陸一つが一つの国として存在するテルル連邦国である。テルル連邦国には様々な人種が居住しているらしい。

前世で言えばアメリカ合衆国がそれに当たるのではないだろうか？ と勝手に想像してしまった。この世界の国々は基本的に封建国家である。つまり、権力を中心に主従関係が構成された政治により統治されている。王族の下には貴族が傅き、その下には平民が傅く。

うーん、封建制かあ。これって前世の歴史を鑑みるとそのうち廃れるのでは？ まあ、この世界は前世よりも大分遅れているようだし、魔法もあるようだからそうとは限らないのかしら……？ 封建制とはいえ上に立つ者が賢王であれば国民は幸せに暮らせるのだろうか……ここに来たばかりでまだこの国がよい国かどうかは分からない。

まあ、少しずつ知ればいいか。時間はたっぷりあるのだから……

小説や映画では横柄おうべいな王族や貴族のことが描かれていたりしたけど、いるんだろうなあ、そういう人たち。

地図を見る限りこの場所は王都から結構離れているみたいだから、そうそう関わることはないだろうけど、権力者に近づくと碌くろくなことにならないような気がする。あまり関わらないようにしようっと！

この世界では目立たず、まったりとした日常を過ごそうと決心した瞬間だった。

で、この世界で生きていくために肝心なこと、お金についても調べてみた。

この国の貨幣は、銅貨、銀貨、金貨、白金貨、黒金貨の五種類である。

銅貨一枚が百ロンで日本円換算で百円である。つまり、ロンと円は通貨単位名が違うだけで同じ価値のようだ。銀貨一枚が千ロン、金貨一枚が一万ロン、白金貨一枚が十万ロン、黒金貨一枚が百万ロンの価値がある。

そして、一般庶民の一月の生活費は約五万ロン、つまり日本円で五万円だ。

因みに、この世界ではどの国でも貨幣価値は同じのようだ。ただし、作られた国によってコインに施されている絵柄が違う。

で、ここで重要な問題がある。今、私にはお金がない。神の庭に果物があるから飢え死にすることはないだろうが、それだけでは料理することができない。つまり、せつかく女神様からいただいたお店をオープンすることができないのだ。

何か売れる物はないだろうか？ そう思っただけで寝室へ行っただけで家捜やさがしすることにした。女神様からいただいた物だけど売ってもいいよね？

寝室に入り、まずはタンスの中身からチェックする。

「ん？ あれ？ さっきこんな物あったっけ？」

私はタンスの上に置いてある木でできた熊らしき頭が付いている円柱の置物を手を取った。熊の頭はリアルすぎてなんだか可愛くない。高さは二十センチメートルくらいある。持ち上げる時にジャラッと音がした。中に何か入っているみたいだ。

「中が空洞になっているのかなあ？ どうやって開けるのだろうか？」

私がおもむろに熊の頭を引っ張ると、ポコッという音と共に簡単に取れてしまった。中には銀色のコインがいくつも入っていた。

「えっ？ お金？ なんで？」

暫し固まったが、前世の記憶が蘇ってきた。

そういえば、前世では五百円玉貯金をしていた。プラスチックの熊の貯金箱に。もしかして、それを、この世界バージョンで女神様が再現してくれたのだろうか？

『それは前世のカリンの部屋にあった物を参考に再現した物だとラシフィーヌ様が言っていたぞ。お金も必要だろうからとな』

なるほど、やっぱり思った通りだった。